

阿修羅

第16号
1970.10.27

学苑会中執行委員
委員長代行 小林功二
(連絡先 11号館学生図書)

と介入自治の傲の大学を許す

全ての学友諸君、学生会・中央執行委員会(委員長代行・小林功二)より、現在、大学当局が行っている我々に対する敵対行為と、自治会費凍結の暴動を、明さらかにしていただきます。

あの通期第7・15学生大会以降、情宣特肉派「アシュラ」・立て着・署名活動等を通じて、全二部の学友に対して新生の恩恵を送りこんで来た我々に対し、学生部は一貫して、自治介入・分断策動をなし、理由にせよ(1)事理理由にして、自治会費凍結としてきている。

一方、我々自身も最大なる過失を犯してしまつたことに對し、全二部学友の前で自己批判し、けじめをとり、それは、七・一五学生大会成立後、「任△方針」「人事室」が一括採決後、在職長小泉保雄色の学情が無(1)事が判明したものである。しかし、その事「暴政」であり、規約のつとめて我々は委員長代行として、小林功二君を推し会務を遂行してきている。学生部側は、「七・一五の学生大会を再現せよ」「なごご、不可能な事を強迫の上、(1)がせんとつけ自治会附録部に狂奔して(1)るのである。

我々は、この重大過失について、年内に開催される学生大会で全二部学友の前に向つて(1)とるべきである。

学生大会は、全二部学生の最高意思決定機関であり、その機関の決定に對して、学校側が(1)か(1)の都合のものではないのである。最高意思決定機関「学生大会」で決定された「運動方針」は、中報掲載委員の一人(25分の1)の過失のために、学校側の自治介入により、否決せんとする反動的な学生部に対し、我々は最大の怒りを覚える。

昨年4月12日夜、学生会館前階ロビーに於いて、志留前学生部長は「学生部禁止に向けよう力する」と記者会見を行つた(1)つとも、一切抗議をせよと責任に至つてくる。学生部は「学校と学生とのパイプ役」と言いつつ、学生課長等の善良性を前面に押し出す事により、我々と学校側との「クワシム役」を果たしている。その欺瞞性・反動性・敵対性を明確に捉えなければならぬ。

あの無限付ロッキアアートの為のあの犠牲を無視に、数千万円をかける大学当局。何故か、和泉斗争委員会と「運動方針」を交わしながら、破壊して知らん顔(1)の大学当局。そして、庄助とボス交差して、生動巨行に学館を使用させている大学当局。

精神せよ、大学当局を。許すな、我々に対する敵対行為を。我々の運動は、学校側に「お許し」をうけて行くのではない。明確に、中教審大学打倒の一環として、大学当局に對し、攻撃をかける。徹底的に打倒せよ、攻撃せよ。

中教審大学打倒

学館解放

大学の自治介入粉砕